

いくつかの面接に落ちたあと、わたしが『デイサービスやわらぎ』の求人をつけたのは二週間前のことだった。

ハローワークで、

「こういうのもありますよ」

と相談員のおじさんに介護関係の仕事を紹介され、すぐに検索コーナーへと向かった。

ズラッと並んだパソコンの席はほとんどが埋まっていて、中には寝てる人とかもいて、見回りに来た職員さんに起こされてたけれど、二十七番がそこだけポツンと空いていたのでそこに座った。

わたしは二十七日生まれ、これは明るい前ぶれかも……。

けれど職種欄の中から「介護・福祉」をえらび、県内の求人情報を次から次に見ていくうちに、だんだん画面が暗くなってきた。

会社の求人票のうち三つに一つは備考欄に、

「明るく元気な人、大歓迎」

「人と関わるのが好きな方お待ちしています」

と書き込まれていたからだ。何も書かれてない真っ白な空欄もあるけれど、ほんとはそういう人を求めているにちがいない。

絶望的な気持ちで指だけは勝手にマウスを押したりすべらせたりしてると、何十枚目かの画面にアレッ？ わたしの手が止まった。

今までのコメントは全部印刷の文字だったのに、それより大きな手書きの文字で埋まっていたからだ。スーッとわたしの目はあんなきれいな文字でできたその文章に吸い込まれていく、まるでわたし一人にだけ話しかけられてるみたいに。

「私なんか向いてないと思っているあなた——大丈夫、あなたの経験してきたことすべてがこの仕事の糧になります。一度見学だけでも来られてみてはいかがですか？」

わたしは『デイサービスやわらぎ』の求人票をプリントアウトすると、ハローワークを出てまっすぐ家に帰った。とりあえず見学だけでも行ってみることにしよう。

見学だからラフな恰好でいいやと最初は思ったけれど、よく考えたら私服なんて何年も着古したヨレヨレのジーンズとパーカーしかなく、スカートやブラウスなんて一枚も買ったことがないから、やはりここは高校を卒業した年……だからもうずっと前、に買った面接用のパンツスーツを着ていくことにした。

家の近くの駅から電車で降りた。時間近く乗って、降りたことも名前をきいたこともない駅で降りた。コンビニもハンバーガーや牛丼の店

もない駅前から、求人票に書かれた大まかな地図をたよりに『やわらぎ』をめざした。

だんだんまわりの景色から人も車もいなくなつて、気がついたら左には見たこともない太さの川、右には大きなネズミ色の工場の煙突がホイップクリームみたいな濃い煙を青空めがけ吐き出していた。

それが過ぎると、棒に吊したCDがあちこちでキラキラ光る大きな畑。そしてまた工場・倉庫・畑とだいたいこの三つをくり返した。

そんなのんびりした景色をながめつつ歩いていると、わたしの心臓はギュッととしぼられるみたいに痛みはじめた。初対面の人に会う前はいつもこうなるのだ。

わたしは手の平に人という字を人さし指で書いて飲みこんだ。三人飲みこんだ。テレビでわたしの好きな芸人さんが舞台に立つ前はいつもこうするんですよといってるのを見て、知らない人に会う前はいつもこうしている。

橋を渡って地面が土や砂になった道を歩いていくと、道はだんだん狭くなつて、古そうな木造の一軒家がならんでいて、雑草の生えた空き地があつて、郵便局があつて、道はアスファルトにもどつたけれど自転車二台やつとすれちがえそうな狭い、でもそれしかない一本道が左にカーブしていくと、にぎつたピンク色の建物がみえた。

二階建ての四角いコンクリートの前までいくと、二階の窓の上にはカンバンがあり、上のほうに小さな文字で『ディサービス』下には大きく『やわらぎ』。『サ』や『ビ』や『ら』の字がはげかかつていて読みづらいけれど、やつと着いた。

大きく二回深呼吸すると、カベの上のインターフォンを押した。反応なし。もう一度押すと、ザラザラした音がしたので、

「見学の春田友子です！」

まだインターフォン相手なので大きな声で言えた。

雑音の混ざつたやはりザラザラした声で、

「どうぞ……」

あとのほうはきこえなかったけれど、学校の保健室の入り口みたいな曇りガラスの戸をコツコツ叩いて横に引いた。

開いたとたん、ワツとにぎやかな音に包まれた。コンビニ二軒分の広い部屋の中に、丸いテーブルがいくつもあつて、そのまわりにお爺ちゃんお婆ちゃんが座つてワイワイしゃべっていた。柱にもたれてボーッと立ってるお爺ちゃんや買い物カートを押してるお婆ちゃんもいた。

黄緑色のポロシャツに黒いスウェットパンツ姿のおばさんがニコニコ笑いながら近づいてきて、横のクツ箱からスリッパを出し、

「どうぞ」

わたしは深くおじぎしてはきかえた。

「ちやうど今からお茶の時間なんですよ。よかつたらご一緒にどうぞ。まだちよつと時間があるから、その前に、えーっと、どうしようかな、まず一日の流れをザクツと――」

「二階へどうぞ！」

二階から声がした。姿はみえないけれど、女の人の声だった。

黄緑色のシャツのおばさんの眉間にギュッと深いしわができた。

けれどすぐにサーッと消えて、目を細め口の両端を上げた。ゆっくりおじぎしながら差し出した手の平を二階に向けると、いきなりクルッとすばやく回転し早足で行ってしまった。

さびた鉄の階段を上のはうへ目でたどっていった。細長い蛍光灯が二本と横のカベに貼った花の絵がみえるだけで誰の姿もみえない。

『なんだろう？ サツと見て回るだけでいいのに』

おそろおそろ階段に足をのせた。

しーんと張りつめた感じの二階の空気が一段一段近づいてきた。

上りきると、ペン立てをのせた大きな机とソファがあり、その向こうにくつついて並んだ事務機のいちばん奥の真ん中、宴会でいえば主役の席に女の人が座っていた。机の上に二台ある大きなパソコン画面を見比べていた目を急にパツとわたしに向けると、

「どうぞ、お座りになつて」

わたしははいねいにおじぎをすると、ソファの端っこにそっと座った。

部屋の反対側の隅にあるキッチンから、もう一人の女の人が来て持っていたお茶の湯呑みをわたしの前に置いた。わたしよりだいぶ年上の人で、さっき下で何人か見かけた黄緑色のユニフォームでなく、セーターにジーンズ姿だった。今回もていねいにおじぎした。

数分間ひざに手を置き机の表面をみつめて待っていると、
「ごめんなさい、お待たせしちやつて」

主役席の女の人がイスから立って、こちらにやってきた。

その姿をチラッと見ただけで、わたしはまた机の上に目をもどした。

なんといいってもわたしは人と目を合わせるのが苦手で、とくに初対面の人となんてとても無理。一度面接に行つて帰る時、

「あのう、君ねえ――そんな風だったら、どこの面接に行つても結果は目に見えてますよ」

面接官にいわれ、そのときはちよつとイラッとしたけれど、結果的にあのおじさんの言うとおりであったなあ。

でも今の場合、それとは話がちがうのだ。

一瞬しか見なかったけれど、今目の前にいる女の人は、他の人と

全然ちがって、なんというか、ものすごいオーラ、たえていうなら、大女優というか、タカラヅカというか。

机の表面に、その人が向かいに座るのがぼんやり映った。

「こんな恰好で失礼しますね。このあとサブワークがあるもんで：。あなた、きちんとしてらっしゃるのね、髪もスーツによくお似合いよ」

ふいとわたしは顔を上げてその人を見た。なぜだかスツと目を見ることができた。それはたぶん、いやきつとまちがいに、うれしかったからだ。外見のことをめずらしく人にほめられたから。髪といても、ボサボサに伸ばした毛を単に後ろでくくっただけなんです：。

よく見ると、その人はやはり他人とは別格のオーラを放っていた。たぶんわたしより十以上は年上だろうけれど、銀色に染めた髪、完璧なフルメイク、つけまつ毛だろうか、しっとり黒く光る長く反ったまつ毛。

それになんといってもこのドレス！ と呼んでいいだろう、そこにフリルのついたエレガントな花柄のブラウス。

見つめているうちに、自然とわたしの口は半開きになった。

「はじめまして、管理者の平塚です」

にっこり笑って平塚さんはいった。

「あ、サブワークって」

めずらしすぎる、人に、しかも初対面の人にわたしのほうから質問なんて。

平塚さんははさかしそうに照れ笑いしながら、ライブハウスなどで歌っている、プロではないがセミプロのようなもの、CDも出していてアマゾンで購入可能などと語った。けっこう長い話だったが、面白い話だった。

「さあ、そんなことより：。履歴書はお持ち？」

エッ、と思わず口に出してしまった。

「あの、わたし：。」

見学にただけなんで持ってませんと言おうとして、なぜかわたしの手はひざの上に置いたショルダーバッグのチャックを開けていた。いちおう探す姿勢をみせておいて、探し終わってからないという、あくまで面接は見学してみても、それから家でじっくり考えてから――、

「それは何？」

机にひじをついてわたしのカバンの中をのぞいていた平塚さんが言った。奥のほう、おいお茶のペットボトルの下でつぶれたポケットティッシュとのだ飴の間に茶色い封筒がのぞいていた。

あった。そういえば先月面接に行って以来、外出はコンビニくらいでカバンを持って出たことはない。落ちたショックで面接に関わるものすべてを見るのもイヤで、放つたらかしにしてたんだ。

「ありました、でも……」

平塚さんは黙って開いた手の平をわたしのほうにのばした。わたしはその上に封筒をのせた。中から履歴書を取り出した平塚さんは両手でいいねいに広げ、唇に笑みをうかべながら読んだ。読みながら何度もうなずいた。

「いつから来られます？」

履歴書に目を落としたまま、平塚さんがいった。

わたしが黙ったまま固まっていると、平塚さんはゆっくり顔を上げてまっすぐにわたしをみた。

目にもすごいパワーがみなぎっている。優しそうな光を放ってるのに、わたしのすべてを見透かしてるような、ずっと見られ続けたらわたしなんてトロロツと溶けていってしまいそうなの。

「いつ……からでも」

言ったか言わないか、自分でもわからないほどの小声でそう言っていた。とたんに平塚さんの顔がパツと花開いたように輝いた。

「わかってるのよ、あなたが見学だけのつもりで来てることは。」

でも、それじゃもったいない。

わたしにはわかるの、あなたはこの仕事に向いている。この業界でやっていく十分な素質の持ち主だって――

そういうわけでわたしはおよそ二週間前、とりあえず契約社員として『デイサービスやわらぎ』で働くことになった。

けれど、やっぱり、世の中そんなに甘くなかった。

現在一時三十分、午後のレクリエーションの真っ最中だ。

さっきカベの丸時計を見たのはちょうど一時半、そろそろ二時前かなと思つたのに八分しかたつていない。

目の前にはフトンみたいな生地を着た、おっとりした白い髪のお婆さんがすわっている。わたしはしゃがんで見上げながら、

「かわいいですね」

お婆さんがあやしてる赤ちゃん人形をみて、言った。さっきも言った。きのうもおととも、その言葉しか言っていないから、ほかのもっと気のきいた、というか、思いのこもったというのかな、そんなひと言をかけたのに、いくら首をひねっても出てこない。

今夜もお風呂に浸かりながら考えよう。

作れるかぎりで目いっぱい作り笑いを作ると、わたしは立って他の利用者さんへと向かった。今日の出席者は全部で三十三名、研修で習つたとおり、最低一人一回は声かけせねば。

折り畳み式の小さな机を広げて、その上に置いたクロスワードパズルをにらんでるお爺さんがいた。えんぴつを握りしめ、白くて太いまゆ毛をよせて、ウンウンうなっている。わたしはそうっとのぞきこんだ。まだ一つも埋まっていない。

『カリフラワーとよく似た形の濃い緑色の野菜』

「アッ、ほら、さつきお昼ご飯に出た、ブではじまるー」

お爺さんはいきなり両手をバン！と本の上にふせてクロスワードをかくした。

「うるさい！ 人の邪魔をするな！ お前いったいどのどいつだ！」

わたしは一步とびのいて唇をふるわせながら、黄緑色のポロシャツの胸をひっぱり名札がよくみえるようにお爺さんの目に近づけ、

「春田です、春田友子、小学校の教科書に出てきそうな名前って昔はよくいわれました」

これは初日の自己紹介の時、利用者さん一人一人に言ったセリフで、初出勤の前の晩に考えつき、我ながらいい出来と自信をもったので、こんな状況でもスラスラ言えた。

お爺さんはもう、わたしなどいかなかったかのようにクロスワードをにらんでいた。

次に見えてきたのはわりと若い、昔はモテただろうなあと思像されるスラッと背が高く、細い顔のお爺さん。ハキハキした陽気な声でスタッフのおばさんと笑い合いながらトランプをしている。

現場主任の大堀さんが出勤初日に、

「あの人がいちばん関わりやすいから、まずはいっしょに遊んでみたら？」

そうアドバイスしてくれた人だ。そこでいっしょに七ならべしてみたが、

「反応うすいねー。もつと楽しんでやりなよ、黙っておざなりにカードいじるだけじゃなくて。」

もういい、つまんないから他の人呼んでーゲームのとちゅうで終わってしまった。

向こうのほうでは机を端っこによせ、空いた広いスペースで七、八人が輪になって風船バレーをしていた。これも初日に大堀さんがすすめてくれ、交ぜてもらったが、わたしのトスした風船は毎回、だれもいないあっちへ行ったりこっちへ行ったり、メンバー中最高齢のお年寄りよりヘタだった。

若々しいかけ声とともに盛り上がっていた輪の中の空気が、わたしのエリアに風船が飛んでくるたび、凍てついた。あれ以来一度も参加していない。

たいした声かけもせず施設内をひと回りして最初のお婆さんの前

にもどった。お婆さんは空のほ乳瓶で赤ちゃん人形にミルクを飲ませていた。

どう考えても、このままじゃもたない。正式な名称は知らないけれど、面接の時サインしたお試し契約期間の三ヶ月さえ、とても終えられそうにない。

平塚さんに相談してみよう。

「あなたのおっしゃってくれたことは一体何だったんですか？　今のところわたしのどこを探しても、素質のソの字も見当たらないんですけど！」

けれどどういうわけか、このひと月間、平塚さんの姿を見かけることはめったになかった。たまにお昼の休憩時間、二階の事務所で見かけても、難しい顔でパソコンをにらんでいて、とても話しかけられそうにない。

今も休憩時間中、わたしは二階の隅にある休憩用の小部屋でご飯を食べているけれど、ドアの窓ガラスをのぞいても事務所に平塚さんの姿はなかった。

せまい休憩室には小さな丸テーブルが一つあって、今スタッフのお婆さん三人とわたしは肩がくっつきそうな近さでイスに座ってお昼ご飯を食べている。

この部屋がもうちよつと広くて、テーブルももっと大きな四角だったらなあとも思う。そしたら向こうの角辺りにお婆さん三人が今みたいにワイワイ言いながら食べ、細長く離れた反対側の角に座るわたしが黙って食べていても、そんなに不自然じゃないのに……

休憩は何人がずつ時間をずらして取ることになっている。入ったばかりの頃、大堀主任が、

「年近いほうが色々話しやすいでしょ」

スタッフの中でも数少ない二十代三十代の若手の人たちと時間がかぶるようにしてくれた。

けれど彼らの食べながらの話題は結婚生活や離婚の原因、恋愛の相談や打ち明け話ばかり。最初のうちわたしにも話を振ってくれてたけれど、わたしが、「さあ……」「いえ、別に」「どうなんですかねえ……」あいまいな返事をくり返していると、すぐに何もきかれなくなつた。

いつのまにか昼食を共にするのはお婆さんばかりになっていった。わたしの困惑してる様子をみて、若い人の誰かがそうするよう大堀さんに言ってくれたのかもしれない。

「お心遣いありがとうございます……、
「ほら、あの人、入浴介助の時おしっこするから」

三人のうちやせたおばさんがそういいながら、わたしの目をまっすぐに見た。わたしは大きくうなずいた。

「えっ、そうなの？」

太ったおばさんが目を丸くして、ちくわの刺さった箸を止めた。

わたしも両目をいっぱいに広げ驚きの表情を作ろうとする。

「ない、ない、そんなわけ……ねえ？」

やせても太ってもないおばさんがわたしに振り向いていった。

同時に他の二人も、三人そろってわたしの顔をみた。

出てこい、言葉よ、今すぐ、早く早く、何でもいいから。

間が空いたのはほんの一瞬、すぐにまた流れるような割り込むスキのない三人の会話がはじまった。

やっぱり平塚さんに相談しよう。利用者さんだけじゃなく、スタッフ間の問題も含めて。

わたしは急いで食べ終わると、お先に失礼しますと頭を下げて休憩室を出た。

事務所では塩山さん（面接の時お茶をくれた人だ）がポツンと一人、自分の事務机でご飯を食べていた。塩山さんは経理や勤怠管理などしている事務の人で、月末に出勤簿を「お願いします」と渡しにくく時以外、話しかけたことがない。わたしだけじゃなく、みんなもたぶん似たようなもので、一階のスタッフと仕事以外の話をしてるのなんて見たこともない。

そういう意味ではわたしと似ているが、でもわたしとは全然ちがう。なんていうか、信念をいだいてるというか、たしかな地盤にもとづいてるというか。

化粧してない（これもわたしと同じだ）白い顔にもその中心の細い目にも表情はなく、とても冷たい感じが伝わってきてスタッフさん以上に話しかけづらいけれど、勇気を出して、

「あの……」

塩山さんなら平塚さんといちばん仕事の話をしているし、勤怠管理もしてるから、

「平塚さんは、次いつ来られますか？」

塩山さんはほんの一、二本すすっていたカップ麺をものすごく時間をかけてよく嚙んでいた。やっとのどに通すと、

「さあ、今日も来てるはずんだけど……来てないね」

わかりました、ありがとうございますとおじぎして、わたしは階段を下りかけた。

「ああ、そうだ」

うしろで声がしたので、ふりむいた。

「金曜日には来るはず……仕事じゃなく用事で」

そのときはじめて、塩山さんが笑ってるのをみた。うつすら冷た

い、顔の上のただよってるような笑いだけれど。

金曜日の夕方四時前、平塚さんは『やわらぎ』にあらわれた。

わたしがすぐに二階に上がろうとした時、

「そろそろ行くよ」

ガラッと通用口の戸が開き、送迎の運転手のおじさんが顔をのぞかせた。

しまった、今日は添乗員になる当番の日だった。

小一時間かけて送迎を終えると、いつもならその車で駅まで乗せてくれ、そのまま直帰していいいきまりだけれど、わたしは、

「今日はこのあたりで用事が」

終着地の駐車場までいっしょに乗せてもらい、降りたとたん猛ダッシュ、一〇分以内で『やわらぎ』に着いた。

平塚さん、まだいるかな、来てから一時間ちよつとしかたつてないけれど、来てすぐ帰る日もあるから……。

わたしは膝に手をつき腰が抜けたような姿勢でゼーゼーいいながら玄関の戸を開けた。

「おかえり。平塚さんが呼んでたよ」

床に掃除機をかけていたおばさんがわたしをチラッとみていった。

えっ？

ここ最近ほとんど顔を合わせてないし、たまにすれちがっても、こっちは話は話したそうなさぶりさえ見せてないのに。

やっぱり平塚さんはわたしのことをすべてお見通しなのか！

急いでスリッパにはきかえ、手を洗って二階へ上がった。

平塚さんはデスクに座って、パソコンのキーボードの上に置いた水色のファイルにはさまった書類を真剣な顔でみつめていた。真剣、というよりちよつと怖い顔、ピーンと張りつめた空気がここまで伝わってくる。

わたしが近づいても気づいていない。そーっと後ろ足で二、三步下がると、

「あの、お呼びになられてたときいたので……」

恐る恐る声をかけた。

ハッと我に返ったように顔を上げた平塚さんはニツコリ笑うと、

「ああ、おつかれさま。で、いきなりなんだけど、今日の夜ご予定は？」

しばらく意味がわからなかった。そんなこと、だれにもきかれたことがないので。ポカンと平塚さんの顔をみつめていると、

「いえね、あなたとは入社以来なかなかお話しするチャンスに恵まれなくて、一度ゆつくり時間を設けたいとずっと思ってたの。」

それで今晚、ついでに紹介したい面白いお店があるからそこで、どう？」

じわじわと喜びがこみあげてきた。

「塩山さんも誘ったんだけど、用事があって来れないそうです」

なぜか棒読みのワントーン大きな声で平塚さんが言った。

斜め向こうの席にいる塩山さんをチラッとみた。いつもと変わらぬ無表情でパソコンを見ていた。

「とくに、用事は……」

平塚さんはデスクの引き出しを開け、

「ああよかった。じゃ、七時半にここで。わたしは先に行ってるからね」

うつすらパールホワイトに光る名刺を一枚もらった。

家に帰ってシャワーを浴び、古着の山の中からいちばんヨレヨレ度の低いシャツとパーカーとズボンを選び抜いて着ると、早足で駅に向かった。

ひさびさに乗る県内一の繁華街へと向かう電車は、金曜日の夜のせいもあって混んでいた。仕事帰りといった身なりのサラリーマンやOL、商工会議所の寄り合いみたいなおじさんたち、地味でほのぼのした市内のどこにこんなひそんでいたのか、けっこうな数のヤンキーたちの間で、身を固くして二、三十分つり革につかまっていた。駅の大きい方の改札口を出ると、ものすごい人ごみが電車以上にぎゅうぎゅう詰めになっていて、そのすきをぬってやっと東口に出た。

飲食店のネオンがピカピカ反射する地面をにらみ早歩きし、短い横断歩道を何個か渡ると、だんだん静かに暗くなってきた。

わたしは立ち止まると、パーカーのポケットから平塚さんにもらった名刺を出した。裏に書いてある地図をみながら、ファミマの角を右に折れた。

二、三分歩くと、地面すれすれに付いたひっそり黒いカンパンの中で銀色の字が光っていた。名刺の店名と照らし合わせた。

『ライブバー Bプラス』

あった、ここだ。

カンパンにはB1と書いてあり、その横で人さし指のマークが下を向いてるから、木の手すりが付いたらせん階段を下りていった。薄暗い階段を踏み外しそうになりながら下りていくと、黒い木の扉があった。クリスマスツリーみたいな飾りがキラキラその上で光っていて、店の名前を書いたさびた銅みたいな色の板を囲んでいた。

どうしよう。こんなお店、入ったことない。こんな店どころか、外食なんてほとんどしたことがない。経済的な理由や人前で食べる

気まずさもあるけれど、何より注文がなかなか決められないからだ。
 ごくたまにファミレスなんかへ行っても、一人でいても決まらな
 いのに、

「お決まりですか？」

店員さんにきかれるとますます答えが出なくて、当てずっぽうに
 メニューを指さし「これ」食べたくもないしかなり高価な『カジキ
 マグロの網焼き御膳』なんて決めておいたチーズバーガーやフイレオ

だからマクドナルドでも決めておいたチーズバーガーやフイレオ
 フィッシュしか買ったことがない。牛井は声に出して注文する吉野
 家よりも食券を買う松屋のほうがよい。

そのときカランとベルが鳴って扉が開いた。ゴツンと扉の角に頭
 をぶつけた。

「あら、ごめんなさい！」

頭をおさえてると、ハキハキ元気な声がした。派手なセーターを
 着、明るい茶色に紫やグリーンの混じったカーリーヘアのおばさん
 が出てきて、わたしの頭をなでた。

「マホガニーだから痛かったでしょう。お客様ですよ、どうぞお
 入りになって」

扉を九十度開けてわたしを手まねきした。

店に入ると、すぐ横にあるカウンターにおばさんは入った。ふた
 たびの手まねきでカウンターの前にわたしが行くと、

「ワンドリンク付いてますので、好きなものを」

カウンターの上のメニューを指していった。

えっ、ただで飲めるの？ ちよっとうれしくなっただけメニューにび
 ったり顔をよせた。

お酒ばかりじゃないか！

「あの、ジュースとかは……」

「ごきますよ」

おばさんが指した右下隅を見ると、あった。今日こそ迷ってはい
 けない、真っ先に目に飛び込んできた

「ペリエで」

なんだかわからないけれど注文した。

「ペリエですね、チャージ代千五百円になります」

えっ、ただじゃなかったの？ しかも千……五百円！

「こういうお店初めて？ ここはね……」

わたしがカバンからノロノロサイフを出してるのをみておばさん
 がいいかけた時、

「いらっしやい！」

うしろのほうで声がした。

奥のほうのテーブル席に座ってるおばさん四人の中に、手を振っ

てる平塚さんがいた。

代金を払いペリエのビンを持ってその場にじっと立っていると、平塚さんはイスから半分立ちかけながら他の三人に何か言っていた。さつきやわらぎで着ていた服とはちがう、ヒマワリ柄の黄色いドレスで近づいてきた。

店には二人掛けや四人掛けのテーブルが何個もあって、あちこちにポツポツ一人二人と座っていて、全部で十人もいなかった。

正面の奥は一段高くなったステージで、真ん中にマイクスタンドや譜面台、うしろのカベぎわに大きなスピーカーが二つあった。

ステージ正面がまっすぐ見える二人掛けのテーブルを平塚さんが示し、わたしが座ると向かいに座った。

「遠いところ、わざわざ来てくれてありがとう」

わたしはコクツと頭を下げた。

「どう、仕事には慣れた？ 何だか辛そうにみえることもあるけど、でもあなた、自分では気がついてないでしょうけど、少しずつ着実に成長してるわ。長年いろんな職員を見てきたからわかるの。」

仲のいいスタッフはできた？ まあちよっと怖そうなおばさんは多いけど、悩みや心配事、打ち明ける相手がもしいなければ遠慮なくわたしに言って、いつでも相談に――」

「ハナさん、時間なんでそろそろスタンバイお願いします」

店長らしきさっきのおばさんが言った。そういえば平塚さんの下の名前、華子だったなあ。

「ひと仕事してくるんで、続きはまたあとで」

平塚さんは立つと、ゆっくり胸を張ってステージへと向かった。さつき事務所ですらにらんでいた水色のファイルを譜面台に置くと、マイクを持ち、

「みなさん、今晚は。週末だというのに今日もこんなに来ていただいて……いろんなお顔がみえます、いつも来て下さる方、たまに来て下さる方、付度でイヤイヤ来て下さる方」

小さな笑いが起こった。

「そんななか今日が初めて、という方がお一人います。わたしの職場の仲間です。その人に来なきやよかった！ と思われないう、来週職場で、ひどかったよ！ うわさが広まらないよう、精一杯歌います。では聴いてください」

スピーカーから、いきものがかり『ありがとう』のイントロが流れはじめた。

月曜日の昼休み、パンとおにぎりとジュースを持って休憩室のドアを開けると、おばさん三人の視線をいつせいに浴びた。

「ねえねえ、金曜日行ったの？ 誘われたんでしょ？」

太ったおばさんがいった。

「ああ、とうなずくと、

「あらかじめ言つたといてあげればよかったあー、あれはね、断つていい案件」

「やせたおばさんがゆっくり噛みながらいった。

「わたしらもね、もれなく全員誘われてるのよ。

何年か前にね、もう辞めた人だけど、誘われてただの飲み会だと思つて、もしかしてご馳走してくれるかもつて行ったのよ。次の日カンカンに怒つてたわ、なんで電車賃払ってカラオケ聴きに行かないやいけなのって」

「で、どうだった？」

「楽しかった？」

「なわけないでしょ」

「何曲歌つた？」

「曲目は？ 演歌？ 歌謡曲？」

あのあと平塚さんはいきものがかりを含め、計三曲歌つた。どれもわたしの聴いたことがある、わたしかわたしより下の世代向けのJポップだった。

三曲歌い終えたあと、平塚さんのまわりにはいつもだれか取り巻きがいて、あっちの席、こっちの席へ移動しては楽しそうにおしゃべりしていた。わたしのテーブルに来ることはなかった。

その間もステージではかわるがわる誰かが歌つていて、結局お開きになったのは十時。ステージに全員つどつて記念撮影（わたしも無理矢理参加）のあと、

「このあと打ち上げあるんだけど、春田さんもよかつたら」

平塚さんにいわれたけれど、丁重にお断りして帰った。

目の前でおばさんたちはもう平塚さんのカラオケ話から最近亡くなった演歌歌手の話題に移っていた。

わたしははつきりと決意した。三ヶ月の契約期間が切れたら辞めよう。どうみても慢性的な人手不足だし、わたしが入ったあともすでに二人辞めてるから、引き留められる可能性大だけれど、きつぱり断ろう。

とはいえ、期間満了まであとひと月あまり、一日一日と近づいてくるにつれ、だんだんドキドキしてきた。

契約の延長、もしかして正社員として雇用……甘くて時に情熱的な平塚さんの言葉をわたしははね返せるだろうか？

いついわれるか、ヒヤヒヤした思いで二階に上がり、平塚さんが

いないのをみてホツとする毎日がつづいた。

とうとう満了までひと月を切った月曜日の朝、わたしたちスタッフが事務所の机のまわりで、そろそろ朝礼を始めようと座りかけた八時半前、平塚さんが階段を上ってきた。

めずらしいなあ、そういえば平塚さんが朝礼に間に合うのはわたしの入社初日以来だ。

うしろからもう一つ、足音がきこえた。ドスッ、ドスッ。雪山を重い荷物を背負って登っているみたいなの、ゆっくりと一歩一歩ずつしり踏みしめるような足音。

上りきったその人の全身がみえた。がっしりした体格、まるで女子プロレスラーかラグビー選手みたいな。短髪で上下紺のジャージだからよけいそう見えるのかもしれない。

その人は階段の手すりをにぎったまま、その場で足踏みするような足の動きをつづけ、ちよつとずつ回転しながら奥のキッチンやトイレがあるほうへ体の向きを変えた。わたしたちからはその人の広い背中しかみえなくなった。時々チラチラと平塚さんのほうをみている。

平塚さんは自分のデスクにカバンを置き、メールをチェックしてののか、立ったままパソコンのマウスをにぎっていた。

「おはようございます。さてみなさん」

さわやかな口調でいいながら平塚さんがわたしたちの前に立つと、その人は急にあわてたような小刻みな足どりで平塚さんに近づいていった。平塚さんのうしろに隠れるように、肩をすぼめうつむいて立った。体格の圧倒的な違いから、隠れてるようにはみえなかったけれど。

「今日から我々の新しい仲間となってくれる方を紹介します。」

山田道子さんです。この方、こういったお仕事は初めてで、わからないことばかりだと思います。何でも一から手取り足取り教えてあげてください。

じゃ、山田さん、簡単な自己紹介を」

山田さんは一歩だけ前に出た。床を向いたままの顔がだんだん赤くなってきた。おへその前であからませてる両手の動きがクネクネはげしくなった。パツと目を閉じ顔を上げると、

「……ねがいし……」

山田さんにおどろいたのは他のだれより、わたしだったはずだ。わたしより口数が少なく、わたしより声の小さな人に初めて出会ったのだから。

何かきかれて、答えが「はい」か「いいえ」の時は、まるで別人み

たいに元気なよく通る声が返ってくる。けれどそれ以外の具体的な言葉で答えなきやいけない時は、うーんと首をひねったきり、十秒以上たつて「……です」しかきかれなかった。

うわさによれば山田さんはハローワークで採用されたんじゃない、平塚さんの知り合いだとのことだ。あつ、だからなのか——利用者さんのお昼ご飯がおわたあと、洗い物当番のスタッフはキッチンに入ってお皿やコップやトレイを洗う。洗いおえたら食器を拭いたタオルを三十分間ハイターに浸けておかないといけないきまりなのに、山田さんはよく忘れる。わたしも最初の頃よく忘れていたし、今でもたまに忘れる。

わたしが忘れた時、初回から主任の大堀さんは、
「あれっ、あたし言わなかったっけ、てっきり言ったとばかり……
いかにいかに、そろそろあたしも始まったかな」

「えーこれは一個人の問題ですが、周知徹底のためみんなにも言います……」

みんなの前で公開説教。

ところが山田さんが忘れた時はいつでも、
「ゴメン、あたしの言い方あいまいだった！」

マンツーマンのていねいな説明をくり返した。

他にも……たとえばお風呂から出た女性の利用者さんの髪を乾かす時、わたしはドライヤーを頭皮に近づけすぎ、

「熱っ！」

すぐにスタッフのおばさんが飛んできて、

「貸して！ わたしがやる、他の仕事して」

ドライヤーをうばわれたものだが、山田さんの場合、ドライヤーを持たないほうの手をまるで車のワイパーみたいに単調に動かしてたらお婆ちゃんが、

「ねえ、もっとていねいにしてよ！」

すかさず割り込んだスタッフは山田さんの手に手を重ね、

「さあ、こんな風にふんわり、優しく」

あとは……そう、利用者さんが帰ったあとの掃除。イスを全部テーブルの上に逆さにのせて掃除機をかけ、そのあとモップがけするのだが、わたしがしていると、

「まあ、優雅にモップいじり……踊ってるみたい、楽しい？」

山田さんという……

あつ、これはちがった。モップがけについていえば、山田さんはわたしはもちろん、他のだれよりもよくできていた。

体格に似合わない機敏な動き、というよりギクシャクしてるけれど、動画を二倍速か時には四倍速したような動きで床をこすった。

すばやい分、同じ所を何度もこするから、床はワックスがけしたみたい。ピカピカになった。

モップがけだけじゃない。昼ご飯を料理する時野菜を切るのも、食べたあとお皿を洗うのも拭くのも、ちよつと雑だけれどもちやくちや速かった。

「山田さん、何をさせても手早いわね」

だれかにほめられても山田さんの顔に笑みがうかぶことはなく、いつもののっぺりした顔で、

「え……あ……その……」

ノソノソうなずきながら、伸びたテープみたいな口調で答えた。

山田さんは速いだけでなく、早かった。

運転免許をもってる山田さんは送迎車のドライバーを任された。

初運転の前日、なぜかわたしが大堀主任から添乗員だといわれた。シフトは他の人に決まっていたので、

「あの、明日はわたしとちが……」

「ああ、運転手が一人増えたから添乗員のシフトも変更」

ぜったいテキトーに決めたなと思ったけれど、うなずいた。

次の日の朝、送迎の出発は八時だから七時半めざして駅から『やわらぎ』に向かっていた。いつもは七時四十五分をめざすのだが、送迎に回る順番をわかつてるいつものドライバーのおじさんたちが、つて山田さんだから、わたしがナビしないといけないかも。各ご家庭の場所と回るルートを地図でチェックするため早く向かった。

『ちよつと早すぎたかな』

カバンから百均で買った時計を出して見ると七時十分、早くも『やわらぎ』のりんかくが見えてきた。いつも家の前に水をまいてるおばさんや、玄関にイスを出して外をながめてるお爺さんもまだいない。

あれっ？ 『やわらぎ』の正面入口の前に人が立っている。じつとピンクのカベのほうを向いて微動だにしない、青い大きな人影。

山田さんだ。

わたしは小走りに近づくと、

「おはようございます、ほんとに早いですね」

「……ます。すい……」

カギを開けて中に入ると、山田さんはいきなり階段を急ダッシュで駆け上がった。ポケットから小さな紙切れを出し、それを見ながらカベのキーボックスの暗証番号を押して開けると、車のキーを取り出した。猛スピードで階段を駆け下りてきた。

山田さんは肩からリュックを下ろして中からポシェットを出し、キーを入れたそれをヒモでたすき掛けにした。そのまま玄関に向か

おうとする山田さんに、

「あの、送迎の時間はだいたい決まってるんで、まだちょっと早い
かと……」

「あ、すいま……」

山田さんはもどつてきて、カベのあちこちに貼った、利用者さんの書いた習字やぬり絵をみつめていた。それもほんの一、二分しかつづかず、そろそろ両腕をこすり合わせたり足踏みしたりした。

地図を広げていたわたしまでそろそろ出発しますか……家の前で待つことにな

りますか」

しかたなく言った。山田さんはうなずき、大股で玄関まですぐに到着すると、閉まった戸の前でわたしを待った。

一人目の内藤さんが住むマンションの前まで車がくると、七時四十二分。内藤さんの娘さんにいわれてる送迎時刻まで三十分以上ある。

そりゃそうだ。出発が早すぎるだけじゃなくて、車も飛ばしすぎだ。法定速度ギリギリで急発進・急ブレーキのくり返し、生きた心地がしなかった。

わたしは山田さんに言って、近くのコンビニ駐車場に止めてもらった。

「ちょっとトイレに」

車を降りてコンビニに入った。ほんとトイレに行きたくはなかったけれど、二人きりで三十分以上もたせるのはつらかったから。

形だけのトイレに入って出てくると、缶コーヒーを二本買い車にもどった。これも気配りではなく、ほんのちよつとでも沈黙を埋めるしぐさを作るためのアイテム。

「よかったらどうぞ」

助手席にすわると、缶立てに一本置いた。山田さんはコトツと頭を下げると缶をそつと持ち上げた。

すぐにジリジリと気まずい時間がはじまった。わたしは利用者さんの座る位置をチェックするかのように、ワゴン車の後部座席を見回したり、コーヒーをちよつとずつなめるしぐさをくり返した。山田さんはあごを胸にピッタリ押しつけ、両手でコロコロ転がしてる缶をみつめていた。

だめだ、もう限界。そろそろ何か言わなくては。そうだ。

「山田さん、平塚管理者とお知り合いだそうですね。どういったご関係で？」

「……」

しまった、質問形式はよくない、あくまで自己完結型、声に出し

てのひとりごとで。

「肌寒くなってきましたねー。あつ、コーヒー、ホットでよかったですか？ 冬でもアイス飲む人いますよねー。わたしは夏でもホット派、バカ舌なんです。缶コーヒーだけはこだわりがあつてですね、飲むのはきまってー」

アレッ？ わたし、けっこうしゃべれてる！ こんなに人に向かって自分からしゃべるの、生まれてはじめてかも。

なんだかこわくなってきた。自分で自分の声をきくのが不気味だ。まるで車の中に山田さんはいなくて、ほんとはわたし一人で、ペラペラひとりごとをしやべりつづけてるみたいだ。

車の中が急にはっきり目に映った。思わず手をのばしてダッシュボードのボタンを押した。はじめからこうすればよかった。ラジオが鳴りだした。ききおぼえのある昭和の名曲が流れてきた。

「あつ、この曲知ってる！ お母さんがよく鼻歌で歌ってた、なんだっけ、えーっと……」

またスラスラしゃべってる。山田さんはどう思ってるだろう、いつもは山田さんよりちよつとだけ多くしゃべる程度なのに、いきなりペラペラと。

そつと山田さんの顔をみた。

「異邦人」

そのときはじめて、山田さんの口から普通名詞がもれるのをきき、はじめて山田さんがほほえむのをみた。

人のこと、気にしてる場合じゃない。すっかり忘れていた。

気がついていたら契約満了まであと二週間を切ってるじゃないか！

どうなってるんだろう、会社から何もいわれなければ自動的に今月末で終了になるのか、まあわたしの能力からすればそれがふつうだし、でも派遣会社ならひと月前には、

「残念ですが今月いっぱいです」

言ってくれたのに。

やっぱりわたしからきいてみよう。平塚さんか塩山さん、どちらも言い出しづらいけれど、どちらかといえば塩山さんだ。

お昼を急いで食べおえたわたしは塩山さんのデスクに近づいた。

「あの、少しお話、いいですか？」

細い目をさらに細めて何か書いていた塩山さんは顔を上げないまま、

「どうぞ」

「わたしの契約、今月いっぱいまでなんです。来月から……」
塩山さんはやつと手を止め、ハアーとため息をついて顔を上げた。
「これは言いにくいんだけど、ひと月ずつ延長されることになって

るの、自動的に、本人から辞める申し出がなければ。

面接のときちゃんと説明しないのが悪い、それに労基法にも違反してるはずだけど、言いたいのはそのこと？ だったら管理者に直接言ってみて」

「いえ、そんなつもりじゃ……」

そのときトイレのドアがバタツと開いた。水の流れる音がして人が出てきた。平塚さんだ！ 来ていたのか……。

平塚さんはゆっくりキッチンまで行って手を洗うと、もどってきて休憩室の前で止まった。

「ちょっといいかしら？」

わたしの顔をみて言った。

わたしはうなずいて小走りに駆けよると、平塚さんは休憩室のドアをノックして開けた。

食後のおしゃべりに夢中だったおばさんたちの声が一瞬で止んだ。みんな目をいっぱいに広げて平塚さんを見上げていた。

「ごめんね、今日だけよそで過ごしてもらえるかな」

平塚さんがいうと、みんなあわてて弁当箱やペットボトルをエコバッグに投げこみ、黙ったままぞろぞろ出ていった。

平塚さんが奥に、わたしはその前にすわった。

「失礼だけど塩山さんとの会話、聞かせてもらったわ。

手続き上の不備があったこと、管理者として率直に謝らせて頂きます、ごめんなさい」

テーブルにおでこがつくくらい、頭を下げた。

「ただあなたもご覧になってわかるとおり、一年中募集をかけてもなかなか面接にも来てくれない、採用してもすぐに辞めていく、そんな状況の中で辞めてほしくないって気持ちから、つついとお手盛りになってしまったて。

それにわたしも会議や研修なんかでなかなか出社できないでしょ、そういうわけなの」

平塚さんはもう一度深々とおじぎした。わたしも同じくらい深くおじぎした。『会議や研修じゃなく歌や遊び、ってみんな言ってるよ』そんな心の声は圧倒的なオーラの前で炎天下のかき氷みたいにあつという間に溶け、サラサラどこかへ流れていつてしまう。

顔を上げると、まだ頭を下げていた。それが急に上がると、同時に平塚さんの目が輝いた。

「ところで、どう？ 山田さんは。きいたわよ彼女から、春田さんがとてもよくしてくれるって」

平塚さんとはふつうに会話してるのかな。

「正直にいつてみて、仕事の上で彼女といっしょにやっていて何か不都合はない？」

「……あ、いえ、とくに、いつもとってもすばやい動きで……」
平塚さんのまゆ毛がスーッと上がってまん中で寄った。遠くをながめる目になった。

「そう……。それはきつとあのことが原因……。昔いろいろあったから」

わたしは自然と前のめりになっていた。

「ミチさんはね……。ああわたしたちはそう呼んでるの、歌の世界ではね。」

カラオケ教室の先生だったの、だからわたしにとって今でも彼女は先生のまま。プロデビューも決まっていたのよ、大手レコード会社から」

いよいよデビューを翌日にひかえた日の夜、ライブハウスでのワマンライブのあと、交通事故にあった。命に別状はなかったが、脳の半分に大きなダメージを負った。ほとんど植物状態のまま話すこともできず、もうずっとこのままかと思っていたら少しずつ回復、一年あまりのち、今から四年前に退院できたそうだ。

「もう一日、たったの一日だけデビューが早かったら……。無意識のそんな思いが行動を早めさせてるんじゃないかな、仕事でも。」

この四年、清掃の仕事とか警備員とかしてきたみたいだけど、どこも長く続かなくてね。

たぶん今はあなたが心の支えだと思うの。あなたがいなくなれば、ミチさんもきつと辞める」

平塚さんはテーブルに肘をついてうずくまっていた。見たことないくらいオーラが消えて小さくみえた。

けれどすぐにまた目の中に星が光り、

「でもね、不思議なことに歌は歌えるの、少なくともわたしの前では、それも昔とちつとも変わらないすばらしい声で。」

一度聴かせてあげたいなあ、あなたにもみんなにも」
結局わたしはもうひと月契約をのばすことになった。

べつにミチさん（仕事中には今までどおり「山田さん」と呼んでいたが、心の中ではそう呼んでいた）を支えよう！ と積極的に思ってたんじゃない。

むしろわたしの心の奥のほうで小さな声が、

「この仕事ではミチさんより、わたしのほうがマシ」

そうきこえてきて、あわてて首をふってその声をかき消した。

『やわらぎ』ではふた月に一回、利用者さんのための『おたのしみ会』を開いているそうだ。ほんとには先月開くはずだったが、スタッフを立て続けに辞めたバタバタもあって、今月の最後の金曜日、開催されることになった。

「あなたと山田さんの歓迎会も兼ねて」

「いよいよ会を週末にむかえるその週の火曜日、事務所ですれちがった時平塚さんは、

「サプライズもあるかもよお！」

そういつてパンパンわたしの肩をたたいた。

前日の木曜日、終礼をサッとすますとスタッフ全員で一階のカベや蛍光灯に飾り付けしたり、出し物の小道具を作ったりした。

ミチさんは折り紙をハサミで切ってうちわに貼りつける作業をしていた。今月誕生日をむかえる利用者さんの名前のうちわをかざり、みんなで振るのだそう。

ハサミを動かすミチさんの手はすばやいけれど、切りすぎて『き』が『さ』になったり、『し』がただの『ー』になったりしていた。たまにうまく切っても、のりを塗る手に力を入れすぎギョッギョッと何度も塗るので紙が破れてしまったりした。

まわりのスタッフたちはまるでミチさんが目に入らないみたいに、自分たちの作業に打ち込んでいる。

最近ではみんなそうだ。ミチさんが何かミスをしても、だまって目をそらしたり、それが何度かつづいたら、お互いそっと目を合わせてうなずくだけだ。

わたしもミチさんと二人きりの場面ではサポートしたりするけれど、みんなの前ではみんなと同じようにした。

おたのしみ会当日は朝から大雨で、時々雷も鳴っていた。ふだんから雨の日はお休みする利用者さんもいるから、
「大丈夫かなあ」

と大堀主任は心配していた。

けれど欠席したのは二名だけで、さっきまで窓や天井をうるさく叩いていた雨の音も、いざ会が始まってみるとみんなの声で聞こえなくなった。

司会をつとめる若い男性スタッフが可愛い三つ編みのカツラにまつ白なメイク、セーラー服姿で登場すると、会場は一気に爆笑の渦。

まず最初に今月誕生日の利用者さんの名前がよばれ、スタッフの押す車イスに乗ったお婆ちゃんが前に出ると、みんなのうちわが配られた。うちわの表面いっぱい、つぎはぎだらけの金色や銀色の折り紙の破片で、『きしもとえみこ』となんとかよめた。きのうミチさんがひと足早く帰ったあと（ミチさんは帰るのも誰より早い）みんなで修復したのだ。

スタッフも利用者さんもうちわを振ったり手拍子を取りながらハッピーバースデーを大合唱した。

プレゼントをひぎにのせたお婆ちゃんがもといいた位置にもどる

と、

「さあ、それではおたのしみ会のスタート、盛り上がっていきましよう！」

いきなりA K Bの曲が流れ、二階からドタドタ、セーラー服を着たおじさんおばさん五、六名が駆け下りてきた。

ダンスを三曲披露して大盛り上がりの中、司会者は、
「さて皆さん、ここで私たちの新しい仲間、皆さんが日頃笑顔で楽しく過ごせるお手伝いをしているスタッフを二名、紹介させていただきます。」

「といっても皆さんもう、顔と名前はよくご存じでしょうが、（一名前知らねー」とヤジが飛ぶ）改めて正式にご紹介します」

わたしとミチさんがよばれ、わたしが先に、
「よろしくお願いします」

小さな声でいうと、パラパラとまばらな拍手。
つぎにミチさんが、

「……ます」

もつとまばらな、お米を数粒床にまいたような拍手。

一気にしーんと静まり返った場内の空気は、テーブルをすべて部屋の隅に重ね、紙で作ったゲートボールや輪投げ、三つの穴の一つから着ぐるみをかぶったスタッフが頭を出すモグラ叩きなど、ゲーム大会がはじまると、また勢いを盛り返した。

わたしにはとても長かったけれど、利用者さんにはあつという間かもしれない一時間半がすぎると、お昼の時間。

今日はキッチンで調理したおかずでなく、近くの惣菜屋に注文した唐揚げやサンドイッチ、巻き寿司など。みなさんいつもより美味しい美味しいとよろこばれていた。

食後の休憩がおわると、ビンゴ大会。一度折り返した数字をもとにもどしたり、全部折ってしまう人があちこちにいて、説明して回るのは大変だった。

優勝者にタオルセットが配られると、

「さていよいよ、皆さんお待ちかね、カラオケ大会の始まり始まり——！！」

長い長い延長コードが二本、黒いへビみたいに床をくねくね伝ってきて、その先のこれも黒いマイクスタンドと黒いスピーカーが利用者さんたちの真正面にセッティングされた。

「さあ、トップバッターは？」

ハイハイといくつもの手が上がった。

「じゃあ、いちばん若……くない方から。河本さん、どうぞ！」

何曲きいただろう、十人以上で一人三曲歌う人もいたから……。いろんなお年寄りの声が頭の奥のほうで混ざって、ウォーンとしば

らく鳴りやまなかった。

「さて、宴もたけなわではございますが、そろそろ……」

「ちよっと、肝心な人忘れてない？」

司会者をさえぎってお婆ちゃんの声が飛んだ。

「そうだ、そうだ！」

「聴かせて、ハナさんの歌！」

司会者はまゆ毛をかきながら、

「大変失礼しました、毎回恒例のあの方ですね。では平塚さん……失礼、歌手の時はハナさんですね、呼んでまいります」

司会者が二階へ上がろうとした時、階段をゆっくりとした足音が下りてきた。

平塚さんは司会者からマイクを受け取ると、

「リクエスト、どうもありがとうございます。」

でも今日はわたし、とても歌うことができません。

わたしよりはるかにすばらしい歌い手がここにいます。その人の歌をこれを機会にどうしても皆さんに届けたいからです。

さあミチさん、どうぞこちらへ」

平塚さんがミチさんのほうに手をのばした。ミチさんの小さくていつも下を見ている目がハッと前を見て少しだけ大きくなった。すばやく二、三度首をよこに振った。

平塚さんはびっしりつめて座る利用者さんの右端の列とカベとの狭いすき間を横歩きしてぬけると、うしろのほうに立つミチさんのそばまで行った。ミチさんの肩を抱くように腕を回すと、ミチさんの耳元に何かささやいた。

しばらくしてまた狭いカベぎわを、今度は手をつなぎ合った二人が、平塚さんが先になってミチさんの手を引っぱりながら、ミチさんは引っぱられるままヨタヨタしたステップでついてきた。

マイクスタンドの前まで来ると、また平塚さんはミチさんの耳元で何か言った。するとミチさんも平塚さんの耳に口を近づけた。

「オッケー」

小さくうなずくと平塚さんはうしろに下がって、スピーカーの横に立つスタッフに何か言った。スタッフはスピーカーの頭のほうに光る文字盤をポチポチ押しはじめた。

前にもどってきた平塚さんはマイクスタンドにマイクを差し、真正面にミチさんを立たせると、マイクを傾けてミチさんの口に近づけた。

イントロが流れだした。あっ、わたしの大好きな、宇多田ヒカル

の曲だ。ミチさんの顔に、特別な照明が当てられたみたいに、目にみえない光のような火のようなものが口元を中心にだんだん広がっていく

のがわかった。

ミチさんの唇がかすかに開いた。

七回目のベルで 受話器を取った君

わたしのお腹の底のほうからゾワゾワした冷たいものがせり上がってくる、みるみる胸のあたりまで来て、ブルツとわたしはふるえた。

すごい。宇多田さんより低くてハスキーな声だけれど、なんていうか、もつとこう、奥のほうから、今にもふき出しそうなマグマの、ほんのちよつとした前ぶれのような。

わたしの体は冷たいかたまりにブルブルふるえてるのに、顔だけはカッと熱くほてりはじめた。

唇から自然と こぼれ落ちるメロディー

でも言葉を失った瞬間が いちばんしあわせ

でも、『でも』まで行かなかった。

『メロディー』の『イ』が伸びようとしたその時、いきなり部屋じゅうが真つ暗になり、カラオケも止まった。

「ブレーカー落ちたあ、早くだれか上げてきて！」

平塚さんのどなり声がした。

玄関のほうへイスを持ったスタッフが走っていき、スリッパを脱いでイスの上に乗ると、ブレーカー盤を開いた。

パッと明るくなった。あれっ、ミチさんがいない。

「ミチさんは？」

平塚さんもきいた。

トイレやお風呂がある入り組んだ奥のほうに立っていたスタッフのおばさんがトイレの扉を指さした。近づいて扉をコンコン叩くと、

「山田さん、もう大丈夫、カラオケも鳴るから歌えますよー」

でも結局、四時になって会がお開きになり、利用者さんがゾロゾロ帰りはじめるまで、ミチさんは出てこなかった。

つぎの週の月曜日から、ミチさんは『やわらぎ』に来なくなった。

「あんなことで肝心の仕事に穴開けるなんて」

「まあでも、いてもいなくても……」

「だから言ったでしょ、管理者のコネで入ったのにはろくな人ないな
って」

ミチさんは歌の友達だから管理者は「仕事は頑張らなくていいよ」と許されてるんだとか、入った時から正社員雇用で、休んでもお給料は満額でもらえるんだとか、いろんなよくないうわさが、昼休みや利用者さんが帰ったあと、飛び交った。

いままでミチさんの話題になるとノーコメントを貫いていたスタッフも、えんりよなく攻撃しはじめた。

「よくあることじゃない、ブレーカー落ちるなんて。あんなで凹むって、今までよく生きてこれたわね」

わたしは何か自分にいわれてるみたいで、さすがにブレーカーとともに落ち込んだことはないけれど、ちょっとしたことでもガクンとくるので、きかないようにその場をはなれた。

あの時ブレーカーが落ちたのは大雨のせい、いやいやエアコンとカラオケをタコ足配線したのがそもそもの原因だとか、耳に入った。けれど、そんなじゃない。大雨がふらなくても、タコ足配線に

してなくても、カラオケはとちゅうで止まっていた。わたしも同じようなこれまでを送ってきたから、ミチさんの身に

そんなことが起きてきたのか、わたしにはわかる。ミチさんの生活の小さな一コマ一コマが目にかんだ。
あの人が自動販売機でジュースを買おうとして五百円玉を入れたら、いつもそのままおつりの穴に落ちてきた。あの人が住む部屋の上の階の住人は、何回引越しをくり返しても、いつも夜中まで足音がうるさかった。あの人が喫茶店でモーニングを注文したら、いつもゆで卵の殻はきれいにむけなかった。

ミチさんがいなくなると、またもとの『やわらぎ』にもどった。みんなが気まづい沈黙のなかじつと何かにたえてるような、言いたくても言えないことが目に見えないほこりみたいにみんなの前に積もって、しじゅうお互いの目を見合わせる時間はなくなり、よくしゃべりよく笑う、ひとつの家族みたいな平和をとりもどした。あつ、もちろんわたしをのぞいて。

利用者さんにしても、どのスタッフにもどなったり無視したりする人はいるけれど、そうじゃない人、上品で気さくなお婆ちゃんに、

「そろそろお風呂行きましょうか」
声かけすると、

「他の方いらつしやらない？」
もの静かだけれどいつもニコニコしたお爺ちゃんをカルタにさそうと、

「あんたはいい、パス」

いわれるのはわたしとミチさんでなく、わたしだけになった。

契約更新はひと月ごと、わたしの頭にまた『今月いっぱい』の文字がうかんだ。でも、それよりくつきりうかんできたのは、

『なんとかしてミチさんにもどってもらわねば』

利用者さんがこうしてほしいとか、これはやめてほしいといった自分の意見や要望を紙に書いて入れる『目安箱』がテレビの下の棚にある。みなさんが帰ったあとそれを開け、折りたたんだ紙を開い

てそろえ、平塚さんのデスクの上に置くことになっていた。

ほんとは毎日するきまりだが、平塚さんはあまり来ないし、手紙もほとんど入っていないのでだれも開けようとせず、たまに開けるのがわたしの担当みたいになっていた。

今日も開けると、パラッと落ちてきたのはたったの一枚。広げてよむと、

『うなぎ食べたい 天ぷらも』

二階に持って上がるうと向かいかけたわたしはその文面をみつめたまま固まってしまった。

そうだ、この手がある。

スタッフのみんなはトイレやお風呂の掃除をしたり、キッチンで在庫のチェックをしたり、座って今日の記録をノートパソコンで入力したりしている。わたしは入力がおそいから早く取りかからなきゃいけないけれど、その前に。

テレビの前まで行くと、目安箱の上から小さく切ったメモ用紙を何枚か取った。イスにもどると、まわりをそおっと見まわした。だれもわたしに注目なんかしていない。

ポケットからボールペンを出していちばん上のメモ用紙に、

『山田さんの歌よかった！ またききたい』

『山田さんの歌あれでお願いします？ さいごまできかせて』

『山田さんもう来ないの？ お願い歌いに来て』
ハッとペンをにぎる手を止めた。ダメだ、これじゃ筆跡でバレてしまう。

わたしはふりむいてカベの一面をにらんだ。利用者さんの書いた習字がならべて貼ってある。ダメだ、お手本にならない、そもそも毛筆とペン字はちがうし、みんな達筆すぎる。

しかたない。さっき書いたメモを三枚とも丸めてポケットに入れたり、新しい紙にわざとなよなよした字を書いたり、反対に角張ったり、指先をヒクヒクふるわせたりに書いて書いた。

わたしが書いたニセの投書は平塚さんのデスクの上でたぶん誰にも読まれることなく何日間もそのままだった。平塚さんの欠勤が気づいたからだけれど、ある日ふと見るとデスクの上からなくなっていた。

誰かが捨てたのかな？ 平塚さんはたまにみんなが帰った夜中、事務所に来るらしいけれど、その時どこかにしまったのかな。

ある日、時計の針は三時四十五分、利用者さんの退所時刻が近づき何人かが席を立ちはじめていると、玄関の戸が開いて平塚さんの顔がみえた。

入ってくると、ちょうど玄関付近にいたわたしのそばまで来た。

「みなさん、そのまま、今やってることを続けたままできいて下さい」

声を張り上げてゐるわけじゃないのに、部屋のすみずみにまでどいてそうな声。ポケットから手を出すと、何枚かの紙切れをにぎっていた。わたしの書いたニセ投書だ。顔のよこにかざした。

「みなさんのうち何人かの方から、山田さんにもどってきてほしい、また彼女の歌をききたいというお声をいただきました。管理者として、同じ一人の歌い手として感謝します。」

彼女は今復帰に向け、彼女なりに何とか努力しています。ですからもう少し、待ってあげて下さい、お願いします」

平塚さんは頭を下げた。室内は完全にしーんとして、外を走る灯油販売車の『雪やこんこん』だけがきこえた。

「さあ、帰りましょうか！」

ポンと手を叩いて平塚さんがいうと、急にワイワイガヤガヤにもどった。

平塚さんは階段の手すりをにぎるとそのまま上がりかけたが、少しだけふりむき、

「春田さん、ちょっと」

わたしにだけきこえる声でいった。

まずい、バレたかも、いやバレたにきまつてる。

え、でも、だとしたらさっきのみんなに向けた演説は……。

ゆっくり階段を上っていく平塚さんの背中を見ながら、バクバクはね回る心臓を押さえた。

押さえたまま一段一段、上っていったって事務所のフロアに着くと、もうデスクに座ってる平塚さんに恐る恐る近づいた。

「あなたが置いてくれたのよね、これ」

投書のメモを持ったままいうと、じつと強い目でわたしを見た。

「……はい」

「あなたはどう思った？ 当然目を通してるわよね」

あれ、あなたが書いた？ ときかれるんじゃ……。

「はあ……わたしも同じ意見というか……でもミチさんの気持ちもあつて……」

ミチさんと呼んでしまった。

平塚さんはニツコリ笑いながら、

「さっきも言ったとおり彼女、今頑張ってる。」

あのあと何度も電話したけれど出てくれなかった。部屋に行つてドアをノックしても開けてくれない日がずっと続いた。

やつと……やつとね、先週の火曜日ドアを開けてくれたの。二人で色んな話をしたわ、昔話が多かったけど、最初に会った日のこととか。あの時『Bプラス』でミチのライブがあつて、わたしはお

客。聴いた瞬間ポロポロ涙が出てきて、終わったとたんミチさんに駆け寄って『弟子にして下さい！』って」

フフと笑い声をもらすと、ギーッと音を立てて回転イスを向こう側に回した。

「塩山さん、あなたどう思う？」

パソコン画面の向こうで塩山さんの顔はみえなかったけれど、「別にいいんじゃないですか、仕事さえちゃんとしてくれるなら」

それには答えず平塚さんは、

「実はね、週明けから歌のレッスンにも通ってるの、わたしといっしょに。よくなってるわ、日に日によくなって事故の前にもどってきつつある。」

もう一度みんなの前で歌える覚悟が彼女にできたら、真っ先にあなたに報告する。そうなたら大堀主任にはわたしから指示を出して、レクリエーションの時間をミニライブに割いてもらえるよう手配させる。だからそうなれるよう、あなたも祈っていて」

十二月になった。平塚さんとあんな会話をしたこともほとんど忘れかけ、わたしの頭の中は二十一日に開かれるクリスマス会のことについてばかりだ。利用者さんがよろこぶ何か新しい出し物を一人一つずつ考えてきて、金曜日の終礼で発表しなきゃいけないのだ。

今日も仕事中は何も思い浮かばないまま、家に帰って考えようと更衣室で着がえて出てくると、

「春田さん！」

いつのまに來ていたのか、平塚さんが駆けよってきた。

「やった！ 決まったのよ、ライブの日取りが」

両手の平を顔のよこにかかげ、ハイタッチのポーズを見せた。勢いにのまれ、反射的にわたしは手を出していた。人生初のハイタッチ。

「よかったですね。アッ、もしかしてクリスマス会で……」

ん？ という表情でわたしの顔をみた平塚さんはアーといいながら目をそらし、

「あのね、やっぱり利用者さんの前では緊張してうまく歌える自信がまだないっていう、そんな彼女の気持ちを尊重して、まずは慣れ親しんだホームグラウンド、『Bプラス』で歌うことにしたの。」

いろんな人に声をかけたら、みんな来たい来たいって。やっぱり人気は衰えてないわあ。あっ、大丈夫、あなたの席はちゃんとキープしとくから安心して」

フツと鼻から抜ける笑いがパソコンの向こうからきこえた。

十二月二十三日、日曜日の夕方六時半すぎ。

電車に乗って県内一乗り降りの多い駅で降りたわたしは、東口の繁華街のなるべく端っこをノロノロ歩いている。

この前来た時よりケタ違いにカップルが多く、ますますどんよりした気分でなんとなく見覚えのある角を曲がった。

店がもうすぐそこまで来ると、手前にあるコンビニの店内をのぞきこみレジのうしろに掛かった時計をみた。六時四十三分。まだ早い。ライブスタートの七時ぎりぎりに行こう。コンビニに入った。いつもならもうご飯を食べてる時間なのに、弁当やおにぎりコーナーを見て回っても、全然お腹は空いてこない。何だろう、この気分。体じゅうの重みがだんだんに沈んでいって足の裏から地面に吸いこまれていきそうな、かと思えば胸のあたりから湯気みたいなもの顔のほうまでじわじわ上っていて、体が二つに分かれていきそうな感じ。

あっ、もう五分前だ、そろそろ行かなきゃ。

入口に『Bプラス』のカンバンが立つビルの階段を下りていくと、扉の前には小さなクリスマスツリー、その横にもっと小さな黒板が立ち、

『本日 19:00 ~ 21:00 復活ライブ!!』

扉の取っ手をにぎると、その冷たさがわたしに開けてはいけな

といってるみたいで、こわごわ開けると、

「いらっしやい！」

入ってすぐのフロアに小さな机があり、そのうしろにカラフルだったカーリーヘアをすっきり黒く染めた店長と平塚さんが立っていた。

「間に合ってよかった。今夜は一曲たりとも聞き逃すと損よ。一生後悔するレベル」

平塚さんが目を大きくして真顔でいうと、店長は、

「よければここにサインお願い」

ズラッと名前の書かれた紙の一番下に名前を書いた。その横の欄には、

『ミチさんの歌を聴いたことは?』

みんな『ある』に○していた。しばらく考えてから、わたしは『ある』と『ない』の間に○をした。

カバンからサイフを出し、千五百円数えてると、

「二千五百円になります」

二：：千円も値上げしてる！ わたしは店長の顔をだまってみつめた。

「ワンマンライブはね、特別料金なの。あんた、言ってあげなきゃダメじゃない！」

店長は平塚さんを肘でついた。

平塚さんは両手をこすり合わせ、
「そのかわりいい席取つてあるから、ほらあそこ」

フロアの真ん中あたり、二人掛けのテーブルに『ご予約席』のプレートが立っていた。もう一つのイスには男性が背中を向けて座っている。

カウンターでトマトジュースをもらい、席についた。男性はふりむき軽く頭を下げると、テーブルに置いた小さなノートパソコンに何か打ちはじめた。わたしよりだいぶん年上そう、チリチリのパーマに鼻の下のひげ、おしゃれなジャケットとセーター。

打ちおわるとパソコン画面をわたしのほうに向けた。

『はじめまして 私ここではテツと呼ばれてます よろしく』

わたしはおじぎして自分の名前を言った。男性はあつという顔になり、

『失礼 私声が出ないんで こんな形で会話になります』

わたしはだまって何度もうなずいた。

店の中はこの前とちがって超満員だった。年上のおばさんがほとんどで、おじさんもちらほら混じっていた。みんな結婚式みたいなよそゆきの服で、そこらじゅうでアクセサリーが光っていた。

四人掛けのテーブルに五、六人、二人掛けに三、四人座ってる席も多く、ここに二人しかいないのは平塚さんの気配りなのかな……。

それでも初対面の人と二人きりはさすがに気まずく、店内は話声でザワザワしてるから静かな所よりはましだけれど、時々何か言いたそうにチラチラ目が合うおじさんをみると、何か言わなければ……。

「……あの、ミチさんとはどういった……」

テツさんはまたパソコンを打ちはじめた。

『ボイストレーナーでした ミチの 声が出なくなるまでは

咽頭ガンを患いましてね 声帯を切除したから声はもう

そこだけはまるでつんどすね 才能は全然ちがうけど笑』

会場のざわめきが少しだけ大きくなった。ぴったりした細いズボンやチョッキを着た男の人が三人、客席をぬけてステージの上に立った。今気づいたけれど、ステージにはドラムとギターとベースがあつて、三人はそれぞれの楽器に分かれた。

『みんなプロですよ さつきリハで聴いたけど三人とも上手かつた』

テツさんが画面をみせながらうなずいた。

ギターやドラムの音がポロポロこぼれるなか、客の話し声はますますトーンを高め、遠くの席からでもわたしの耳にとどいた。

「レコード会社の人來てるみたいよ」

「動画撮っていいのかな」

「ヤバイ、ドキドキして酔いが一気にさめた」

わたしだけ場違いな人間で、一人だけこの場からすっかり浮いているのをはつきり感じた。ミチさんはもう、わたしの知ってるミチさんじゃない。わたしの知ってる？ わたしはミチさんのこと、何一つ知ってなんかいない。

シンバルの音が小さく軽快に鳴りだした。ギターとベースとドラムがおさえた音色で演奏をはじめた。

会場のざわめきがだんだん低まり、すっかり止んだ。

ふり返ると、トイレの横の小部屋のドアが開いて、ミチさんが出てきた。

ポツポツ、拍手が起き、みるみる広がって、はげしい夕立みたいな拍手の嵐になった。

ゆっくり客席を歩いてくるミチさん。それでもすそも長い真っ黒なドレス。濃いメイクをした顔は表情がわからないけれど、堂々と真ん前を向いて歩いている。

ステージに上がるとミチさんは、手に持っていた紙の束をはさんだファイルを譜面台にのせた。マイクスタンドの真正面に立つと、マイクを取った。演奏が止んだ。拍手も止んだ。

ミチさんはマイクを口に寄せたまま、じっと立っている。店内は静まり返った。長い長い数秒がたった。

「ミチさん、がんばれ！」

だれかの声が沈黙を破った。ききおぼえのある声。だれ？ わたしだった。

あわてて口をおさえ、うつむいたままトマトジュースの蔭からあたりを見まわした。だれもわたしに振り向いていない。そのかわり、

「そうよ、頑張ってる！」

「待ってたよ！」

「おかえり！」

あちこちからつぎつぎに声が飛んだ。

マイクから小さな声がもれた。

「今日は……ありがと……こんな、いたの……わたしの、ファン……早く、言つてよ」

どっと笑いが起きた。ポツポツした、『やわらぎ』できいたしやべり方だけれど、全然ちがう人にみえた。

ミチさんは譜面のファイルを開くとマイクを握り直し、

「じゃ、早速……一曲目……聴いて……下さい」

演奏がはじまった。ゆったりしたスローテンポ。知らない曲だけれど、なつかしいような、優しくなでつけてくれるようなメロディ。

『この曲 知ってます？』

テツさんが見せてくれた。わたしは首をふった。
『『マイ・ウェイ』古い曲です。私がリクエストしました』

イントロが終わりそうな気配がした。
ミチさんはゆるやかに体をゆらしながら、かすかに首を譜面台のほうに曲げた。

譜面台を見るミチさんの目がだんだん光を集め、ギラギラ大きく輝きだした。

いきなり譜面のファイルから一枚ぬき取ったミチさんは顔を近づけてまじまじと紙をみつめた。

歌はもうはじまっている。バンドのメンバーは三人ともキョロキョロミチさんに目線を送りながら、演奏をつづけた。

どのテールブルでもお互いの顔を見合わせ、ヒソヒソ話し声がもれた。わたしもポカンとしてテツさんとみつめあった。

ドラムの響きがゆっくりと高まり、それにつれてギターとベースの音色もサビに移ろうとする予感をみせた。

ミチさんはスタンドにもどしたマイクのかわりに、しっかりと両手で譜面をつかんだ。おそろしい早口で歌いはじめた。歌ってるんじゃない、早口で歌詞を朗読しはじめた。

あつという間にすべての歌詞を読み終え、パッと右手をふりかざした。譜面はひらひら宙を舞い、ステージの上に落ちた。

サビのメロディーが流れてきた。

ふたたびマイクをつかんだミチさんは深呼吸するみたいに、肩を大きく広げ息を吸い込み、吐く息とともに歌詞を送り出そうとしてるのだけれど、もうどんな言葉も残ってなかった。

※宇多田ヒカル『Automatic』から歌詞を引用しました